

在外インターナショナルスクールにおける母国語としての日本語教育

—JSLとEALの相乗効果をめざして—

ジェシー美幸 (インターナショナルスクールバンコク)

1. 実践対象

現在、放課後に母国語教育として、幼稚園から小学4年生までの子どもたちを対象に国語クラスを週に二回実施している。この発表では、小学生クラスを中心に紹介する。小学生クラスの児童は、大きく分けて、3つのグループに分けられる。

1.1. グループ1

第一言語(L1)が英語で、第二言語(L2)の日本語は、家庭での会話でL1と通り混ぜて使用するのみ。平仮名までは家庭で勉強したものの、読み書きを学習するにあたっては、語彙不足やモチベーションの低さから、日本語の学習が進まなかった経緯がある。また、学齢が上がるにつれ、英語と日本語の知識との間の差が広がり、日本語での会話も危ぶまれるようになる。

1.2. グループ2

L1が日本語、L2が英語。家庭言語は日本語。家庭では日本語のみで会話。ただし、在タイ期間が長引いたり、来タイ期に未就学期であったため、日本の学校教育の経験があまり、或いは全く無く、日本語力が学齢より遅れ気味。学校では英語のサポート(EAL)が不要。

1.3. グループ3

L1が日本語で、L2が英語。家庭言語は日本語。来タイ間もなく、滞在期間は1-2年。通常の英語授業では、英語力が不十分なため、EALのサポートを受けているものの、日本語については、最近まで日本の学校教育を受けており、学齢通りの国語学習が可能。

いずれも、学習言語として日本語に触れる時間は、放課後の日本語クラスに限定される。

2. 場所の特徴や実践状況

当初は、グループ1の子どもたちが1-2年生になった時、家庭で平仮名までは勉強したものの、そこから書けるようになるための壁を越えるのに苦労が多く、賛同した保護者と一緒に「日本語サークル」と読み聞かせと日記を書けるようにするための練習を行うことから始まる。そこへ、徐々にグループ2やグループ3の子どもたちも加わるようになり、現在に至る。また、本年度より当校でも、母国語教育の支援が始まり、放課後の教室使用や、教科書購入などの支援が始まり、これまであまり関心のなかった家庭にも、少しずつ活動が認識され始める。

3. 実践の目標と実践の流れ

3.1. 達成度を可視化

グループ1の子どもたちは、日本語に対する苦手意識が強く、場合によっては劣等感を抱いている子どもも多い。そこで、できていることを認識させるために、出来ない所を探すのではなく、「出来ることを形にする」ための取り組みを中心に行う。

3.1.1. 日記を書く上で、レベルごとに目標を三つ設定した「ミッションカード」を作成。

5回目標を達成できたら次のミッションへ進むことができる。ミッションは文科省の学習指導要領に準拠して作成。

3.1.2. 学期末に成績表の代わりに、文科省の学習指導要領に準拠して作成したコンティナムを用いて達成度を報告。コンティナムは、「話すこと&聞くこと」、「読むこと」そして「書くこと」の目標を学年別にリストアップし、そこへ達成度を示すことで、スキル別

に自分ができることを認識することができる。

3.1.3. コロンビア大学のリーディング&ライティングワークショップモデルを採用。ワークシートのような全員が同じ答えを探す学習でなく、各自の力にあった課題に取り組むことを可能にする。このモデルでは、クラス全体でミニレッスン→作品例の分析→各自で読む・書く→教師の個別の問いかけを通じて、読解の理解度を深めたり、書くことの質を高めていく。このモデルは、通常の英語クラス(以下「通常クラス」)でも実施されている。出来ることを示すための取り組みであり、教師が個別に目標を示すため、日本語が苦手な生徒でも、出来ないプレッシャーが少ない。

3.2. 通常クラスとの相乗効果

通常クラスと同様の学習スタイルを用いることで、国語力の移行を目指す。ワークショップモデルを通じて、グループ1や2の児童は、日本語での読み書きに抵抗があっても、活動の目標が分かりやすく、小さい目標に向けた活動に馴染みがあるため、取り組みやすい。また、グループ3の児童は、英語の通常クラスで、課題を理解していても実際に英語で理解を示しきれなかったり、表現しきれないところを、日本語を使って存分に表現できる。また、通常クラスで理解しきれなくても、L1で再度説明を受けることで、確実に理解することができる。

4. 目標の達成度

4.1. 達成度の可視化

できることを可視化することで、子供達だけでなく保護者にとっても、焦りより、達成感を共有する機会が持てた。苦手意識が強かったグループ1や2の児童までもが、楽しそうに音読のフィードバックを友達に書いたり、書いてもらったものを読んだり、日記のミッションへのこだわる姿や、読解の活動に黙々

と取り組んだり、クラスでの発表をとっても楽しみにしていることから、目標達成の成果が感じられる。

4.2. 通常クラスとの相乗効果

グループ2や3の子ども達が「このシートもらってもっと書いてもいい」、「もう一つお話し書いてもいい」と積極的に、書きたい、読みたいという姿勢を見せているだけでなく、成果物も充実した内容に仕上げている。普段L2である英語でできずにストレスに感じていることを、L1で「やりたい」としており、国語力向上のための相乗効果という点では、大いに成果があったと思う。グループ1については、積極的な反応はなかったものの、過去にあったワークシートへの拒否・拒絶反応に比べると前向きな成果だと言えると思う。

5. まとめ

劣等感を感じる活動を極力排除し、各自が達成可能な活動を行い、通常クラスと平行した活動を通じた相乗効果が少なからず実現した。また、定期的に日本語を学習する環境を設け、日本語学習が習慣化しつつある。この活動の当初の一番大きな目標であった、日本語を学ぶためのモチベーションを高め、モチベーション向上に必要なだけの日本語力を身につける、という点に関しては、かなり達成されているように感じる。

また、このような環境があることで、子どもたちの情緒的安定、そしてアイデンティティの形成にもつながっている。特に、グループ1の子どもたちは、活動当初、日本語を話す目的を見失っており、その時期に比べると、日本語だけで友達と話し合ったり、遊んだり、考えたりすることが、大変でも当たり前だと認識して取り組めるようになったことは、成果だと言えよう。